様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４４８７

研究課題名（和文）イエナ・プランにおける異年齢集団の質保証に関する研究

研究課題名（英文）Research on quality assurance of different age groups in Jena-Plan

研究代表者
佐久間　裕之（SAKUMA, Hiroyuki）

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２３５２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，異年齢集団の質保証の指標となる内的性質を4つの概念から考察した。まず「鍵概念１」としてイエナ・プランにおける「教育共同体」について、次に「鍵概念２」としてイエナ・プランにおける「民主主義」について詳しく論じた。さらにイエナ大学附属フレーベル幼稚園が併設されるまでの経緯や議論を踏まえて、「鍵概念３」としてイエナ・プランの質を担保する「科学性」の問題について言及した。ただし、これはあくまで附属フレーベル幼稚園に関連した限定的な内容にすぎない。さらにイエナ・プランの質保証を考えるうえでも最重要の概念となる「生命への畏敬」を「鍵概念４」として取り上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日、教育界で重視されている「異年齢集団による学習」や「異年齢集団による交流」は、単に異年齢の児童生徒を一緒にすれば済む問題ではない。むしろこうした学習や交流を推し進めるうえで、異年齢集団の内的性質が重要な鍵を握っている。本研究は、現代ドイツにおいて異年齢集団による学習や交流を進める際の理論的支柱の一つとされるイエナ・プランについて研究し、異年齢集団の成否を左右する問題を4つの鍵概念から考察した。

研究成果の概要（英文）：In this study, the internal characteristics that are indicators of quality assurance of different age groups are organized from four concepts. First, we discuss in detail the "education community" of Jena-Plan as "key Concept 1", and then the "democracy" as "key Concept 2". Furthermore, on the basis of the background and discussions leading up to the establishment of the Froebel kindergarten attached to the University of Jena, the "scientificity" is provide as "key concept 3". Furthermore, the "respect for life", which is the most important concept in considering quality assurance of Jena- plan, is taken up as "key concept 4."

研究分野：教育学

キーワード：イエナ・プラン　異年齢集団　質保証　ペーターゼン

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

今日、我が国の教育界では異年齢集団による学習や交流への関心が高まっている。現行の小・中学校学習指導要領が示しているように、(1)「総合的な学習の時間」における「グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態」、(2)特別活動における「異年齢集団による交流」が求められているのである。しかし、「異年齢集団による学習」や「異年齢集団による交流」は、単に異年齢の児童生徒を一緒にすれば済む問題ではない。むしろイエナ・プランの創始者ペーターゼン（Peter Petersen,1884-1952）がイエナ大学附属学校の教育実践において示したように、異年齢集団の内的性質が重要な鍵を握っているのである。

申請者はこれまで、イエナ・プラン実施校における「2 学年混合」、「3 学年混合」、「4 学年混合」の異年齢集団について調査し、そこから異年齢集団が「共同体」（Gemeinschaft）としての内的性質を有するとき、その異年齢集団が適切なものとみなされることも把握してきた。しかし、何をもって「共同体」と見なすのか、その指標についてはドイツのイエナ・プラン実施校を牽引するドイツ・イエナプラン教育学会においても明確化されていないため、異年齢集団の質保証への取り組みが進展していない。この問題を解決するため、ペーターゼンによるイエナ大学附属学校での異年齢集団の実際について調査し、「共同体」としての異年齢集団を規定する指標の解明が求められている。

２．研究の目的

本研究では、現代ドイツにおいて異年齢集団による学習や交流を実施する際の理論的支柱の一つとされているイエナ・プランの源流、すなわちイエナ大学附属学校における学校生活の実際について、関連する文献および原資料に基づき調査し、「共同体」としての異年齢集団を規定する指標の明確化を目指す。

３．研究の方法

本研究では、以下に示す通り、ペーターゼンの代表作『小イエナ・プラン』を中心とする文献研究及びイエナ大学文書館を中心とするイエナ大学附属学校の教育実践に関する原資料の研究を通じて、「共同体」としての異年齢集団を規定する指標の明確化を試みる。

(1)ペーターゼンの代表作『小イエナ・プラン』を中心とする文献研究

イエナ・プランに関する代表作となるペーターゼンの所謂『小イエナ・プラン』（*Der kleine Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, 64.Auflage, Weinheim und Basel:Beltz, 2011）は、初出が 1927 年で、その際の表題は『自由で一般的な国民学校のイエナ・プラン』（*Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Langensalza: Beltz,1927)である。この初版はわずか 41 頁の小冊子であり、この段階ではまだ異年齢集団の構成も未確定であった。その後、本書は版を重ね、総ページ数も 137 頁へと拡充している。本研究では、初版から 64 版までを検討し、異年齢集団を「共同体」と捉えるペーターゼンの思想内容を明らかにする。そのほか、ペーターゼンがイエナ大学附属学校の最初の教師ヴォルフ（Hans Wolff）とともに 1924 年から取り組んできた教育実践に関する最初の記録『労作・生活共同体学校の原則による基礎学校』（*Eine Grundschule nach den Grundsätzen der Arbeits- und Lebensgemeinschaftsschule*, Weimar: Hermann Böhlaus Nachfolger Hof-Buchdruckerei und Verlagsbuchhandlung G.m.b.H.,1925）等の文献研究を実施する。

(2)イエナ大学附属学校における「共同体」としての異年齢集団に関する原資料の研究

イエナ大学附属学校の教育実践に関する原資料（公文書、手書きの実践記録、教材等）は、現在、イエナ大学文書館、ミュンスター大学のペーターゼン文庫、フンボルト大学文書館、そしてペーターゼンの親族が運営するフェヒタのペーターゼン文庫に分散して存在している。本研究においては、イエナ・プランに関する原資料をこれらの文書館及び文庫において探る。

４．研究成果

本研究は、既に実施された基盤研究（C）（課題番号 25381044）「イエナ・プランにおける異年齢集団の構成法に関する研究」（平成 25～27 年度）の続編に位置づけられる。この構成法に関する研究では、異年齢集団の成否を左右しているものがその集団の「共同体」としての内的性質にあることも示唆された。本研究では、さらに異年齢集団の質保証の指標となる内的性質の明確化を目指し、4 つの鍵概念（教育共同体、民主主義、科学性、生命への畏敬）を用いて整理していった。研究期間全体を通じて実施した研究の成果は、佐久間裕之（研究代表）「基盤研究（C）（課題番号 16K04487）『イエナ・プランにおける異年齢集団の質保証に関する研究』（平成 28～30 年度）研究成果報告書」（2019 年 3 月 18 日、pp.1-83）にまとめることができた。

(1)鍵概念１：教育共同体

この報告書では、まず「鍵概念１」としてイエナ・プランにおける「教育共同体」（Erziehungsgemeinschaft）について整理した。ペーターゼンは近代教育の産物である学校を批判し，学校が「教育共同体」になることを願ってイエナ大学附属学校で内的学校改革に着手した人物である。彼は『小イエナ・プラン』の初版（1927 年）第 1 章の冒頭で、「学校がその

教育的な諸機能を真に発揮できるように、昔ながらの学校現実を抜本的に改造するための試み」(引用文献①、3 頁)を実践してきたこと、その際「人間の子どもがその中で、その子どもにとって最良の人間形成をし得るようになる教育共同体はどのように具体化されなければならないか」(引用文献①、7 頁)、そして「人間がその中で、またそれによって彼の個性を人格性にまで完成し得る教育共同体はどのような状態であるべきか 」(引用文献①、7 頁)を問うてきたことを表明している。こうした中心的な問いの中に「教育共同体」という言葉が登場する。

ペーターゼンのいう「教育共同体」は、「自分たちの組織内で国家、教会、宗派、政治あるいはその他の世界観のような世俗的権力による『学校をめぐる争い』をいっさい望まない」(引用文献①、8 頁)、その意味でそのような世俗的影響から自由で自律的な学校を意味している。いわゆる「教育の自律性」を保とうとするこのような学校では、「子どもの幸福にのみ奉仕しようとする両方の当事者〔筆者注：親と教育者〕の誠実な努力がなされる」(引用文献①、8 頁)という。彼の眼差しは、個々の「子どもの幸福」に注がれているのである。

彼はまた「教育共同体」において男女両性、あらゆる階層や宗派、あらゆる才能の子どもたちを一緒にすること、すなわち「混合」(Mischung)を重視し、万人に開かれた学校を追求した。その根底には彼の人間尊重の思想・人間観がある。彼は、人間を単に目的のための手段として捉えたり、あるいは有用性の有無の観点に立つ考え方に対峙する。そして例えば役柄や地位、あるいは能力の有無といった部分的な価値で値踏みする非人間的な動向を批判する。彼はどの人間も「常に目的そのもの」であり、「部分的に必要とされているわけでは決してない。むしろ彼は常に全人として必要とされている」(引用文献①、11 頁)と主張するのである 。彼はまた、どの人間も「彼個人の生命の独自性」を持ち(引用文献①、10 頁)、この点で全く同じであり、平等に尊重されるべきだと考えている 。そしてこの「彼個人の生命の独自性」を「個性」として捉え、教育の課題をこの個々人の「個性」から人格形成を行うことに見ているのである 。そしてそのような人格形成の場となり得る「教育共同体」が如何にあるべきかを問うのである。

では、その「教育共同体」とは何か。彼はそれを「精神的共同体」(geistige Gemeinschaft)として説明している。これは地縁・血縁による原義的な共同体とは異なる。ペーターゼンは「精神というものは、特別な『階級』、『政党』、『性』、『国家』、『種族』、等々に属するがゆえの人間の中にではなく、人間そのものの中に芽生える」(引用文献①、10 頁)と述べている。「精神的共同体」は人間の生物的・人種的・社会的属性に縛られた人間関係からは生じず、人間を人間たらしめる共通項としての「精神」(Geist)が芽生えた「精神的存在」(ein Geistiges)同士の関係から生じるものと捉えられている。彼は後年、この「精神」が芽生えた状態について、ナチス政権下の 1937 年に「お互いを必要とし、お互いの言葉に耳を傾け、お互いに直接独自の関わり合いを持つ」(引用文献②、80 頁)状態と説明した。彼が構想する「教育共同体」は、このような「精神」が学校の成員に芽生え、それぞれが「精神的存在」として「完全な自由の中で」関わり合う精神的共同体であった 。そして学校がこのような共同体になることで、やがて学校外・学校後の実社会の「精神的共同体」化へつながっていくと彼は考えていたのである。

一方、ペーターゼンは外から決まりやルールが強制的に押し付けられるような場合には、「教育共同体」化とは真逆の方向へ学校が歩むとしている。そのような押し付けがなされるならば、結果的に「共同体そのものの、まさに死」が待っていると彼は考えていた。そして共同体の死は、その成員の「プライベートな領域への逃亡」となって現れるとしている(引用文献②、78 頁)。彼がこの考えをナチス政権下で発表したことは特筆すべきことであろう。

このようなペーターゼンの「教育共同体」思想とナチスの「民族共同体」思想とを比較するならば、精神的共同体成立の鍵を成員同士の自由意思に基づく関わり合いの内的状態に求めるペーターゼンの思想と、政治的イデオロギーと化した外圧的なナチスの「民族共同体」思想とは相容れないことがわかる。そして指摘しておかねばならないことは、ペーターゼンの「精神的共同体」思想は、『小イエナ・プラン』の初版(1927 年)から現在の 2011 年版(64 版)に至るまで全く変わらず、一貫している点である。

(2) 鍵概念２：民主主義

次に「鍵概念２」としてイエナ・プランにおける異年齢集団の内的性質を「民主主義」の観点から考察した。この観点に基づく従来の研究から、「批判的学術的ペーターゼン研究」の代表的な人物であるベンナー(Dietrich Benner)とケンパー(Herwart Kemper)による研究、そしてさらに現代の最も先鋭的なペーターゼン批判者オルトマイヤー(Benjamin Ortmeyer)の研究を取りあげて検証した。また、教育実践関係者のファウザー(Peter Fauser)による研究についても検証を行った。まず、ベンナーとケンパーの研究を取りあげると、彼らは 4 つの時期に分けてペーターゼンの民主主義思想を次のように批判的に検討していることが把握された。

①ワイマール共和国時代における『小イエナ・プラン』の初版(1927 年)には、ペーターゼンの議会制民主主義に対する批判が現れている。

②ナチス政権下の論文「ナチズムに照らしたイエナ・プランの教育科学的基礎づけ」(1935 年)には「ドイツの制度と全く相容れない議会制民主主義」に対する批判が現れている。

③第二次大戦直後・旧ソ連支配下でのペーターゼンの言説(1946 年)には、旧ソ連側から提示されたワイマール共和国の思想と類似した「ドイツ学校民主化法」への肯定的な評価が現れている(政局の変化に順応する日和見主義的態度への批判)。

④最晩年のペーターゼンの言説(1949 年以降)として『小イエナ・プラン』に加筆された第

6 章「イエナ・プランの成立史」には、民主主義をはじめ政治的概念が登場しない（意図的に排除されている）。

特筆すべきことは、ベンナーとケンパーによるペーターゼン批判が主に議会制民主主義をめぐってなされた点である。このことは現代の最も先鋭的なペーターゼン批判者オルトマイヤーにおいても同様であった。オルトマイヤーは 1968 年版（47.-51.版）の『小イエナ・プラン』から、「生徒議会や生徒裁判（Schülerparlamente und Schülergerichte）は何らこうした学校を特徴づけるものではないだろう」（引用文献③、8 頁）を引用し、「彼〔筆者注：ペーターゼン〕のプランは生徒議会と生徒裁判を伴う民主主義に導かれた学校と何の関わりもないであろうことを、ペーターゼンは明確にしている」（引用文献④、130 頁）と批判した。

一方、教育実践関係者のファウザー（Peter Fauser）は、ペーターゼンがイエナ大学附属学校で最初の教師ヴォルフ（Hans Wolff）とともに 1924 年からおこなった教育実践に関する最初の記録（『労作・生活共同体学校の原則による基礎学校』、1925 年）を検証した。その際、学校の質保証と質の向上に貢献すべく 2006 年から設けられた権威ある「ドイツ学校賞」が掲げる「6 つの質領域」（sechs Qualitätsbereichen）から、ペーターゼンらの教育実践を評価した。その 6 つとは、「成績」（Leistung）、「多様性」（Vielfalt）、「授業」（Unterricht）、「責任」（Verantwortung）、「学校生活」（Schulleben）、「学校開発」（Schulentwicklung）である。ファウザーは、この 6 領域内に設けられた総数 42 の評価項目のうち 40 項目が充足されており、ペーターゼンの学校がドイツ学校賞の枠内で、優れた学校を専門的に判定する際の質的基準を満たしていると評価している。ただし、充足されていない項目としてファウザーが挙げていたのも議会制民主主義に関わるものであった。

以上のように、議会制民主主義に着目したペーターゼンのイエナ・プラン批判に対して、本研究では、ペーターゼンが議会制民主主義そのものを否定していたわけではなく、子どもたちの発達の視点に立って、学校における議会制民主主義の定着の難しさを語っていたこと、ペーターゼンのイエナ・プランにおいては「平等」へと向かう民主主義の要求が明確に示されていること、また彼の「教育共同体」思想にみられる個々人や個性尊重の思想が「民主主義の根本精神」に合致していることを示した。

（3）鍵概念３：科学性

さらにイエナ大学附属学校にペーターゼンが「大学附属フレーベル幼稚園」を併設するまでの経緯や議論を踏まえて、「鍵概念３」としてイエナ・プランにおける異年齢集団に基づく幼児教育の「科学性」の問題について言及した。ペーターゼンを一躍有名にした「イエナ・プラン」（Jena-Plan）は、新教育連盟第 4 回国際会議（1927 年）において発表されたものである。それは彼が既に 1924 年 4 月からイエナ大学附属学校で取り組んできた内的学校改革の成果を公表したものであった。ただし、この改革案は初等中等学校段階を対象とするものであり、当初はまだ幼児教育を含みこんだものではなかった。しかしその後、約 10 年の時を経てペーターゼンは附属学校にフレーベル幼稚園を併設し、さらに幼稚園と初等中等学校の有機的な接続を訴えるようになるのである。ただし、ペーターゼンは最初からフレーベル幼稚園の併設を考えていたわけではなかった。むしろ彼は当初、モンテッソーリ（Maria Montessori）への強い関心を示していたのである。

しかし一体なぜ関心の対象がモンテッソーリになったのか。ペーターゼンにとってモンテッソーリは、当初、幼児教育について彼が認識していたある問題の解決に貢献できる思想の持ち主であると期待されていた。ペーターゼンは次のように述べている。すなわち、「彼女〔筆者注：モンテッソーリ〕が幼稚園の実践を効果的に活性化してきたという点で、彼女の活動はフリードリヒ・フレーベルの信奉者たちによって繰り広げられてきた実践の科学的な再考と浄化であると見なすことができる」（引用文献⑤、74-75 頁）と。つまり彼は、これまでのフレーベル幼稚園における幼児教育が科学性という観点からみて、少なからぬ問題があると捉えていたことが窺える。その点、自然科学的、医学的知見を持ち、また現代心理学の始祖の一人ヴント（Wilhelm Wundt）の心理学にも影響を受けたモンテッソーリは別格であったと考えられる。彼女の幼児教育は、フレーベルの信奉者たちによる幼児教育を科学性の面から「再考」し「浄化」しうるものとして、そしてそのことによって幼児教育の質保証を科学性の面から担保し得る手がかりとして、彼が評価していたとみることができる（ペーターゼン自身もヴントからの影響を受けた人物の一人であった。彼の 1908 年の学位論文はヴント研究である）。

このことからすれば、ペーターゼンがその後、幼児教育機関を併設する際、モンテッソーリの「子どもの家」を併設したとしても不思議ではない。ところが実際に併設されたのは「子どもの家」ではなかった。ペーターゼンは 1930 年代に入り明確なモンテッソーリ批判を開始しているのである。その批判の中には、モンテッソーリの思想体系や方法に「実証的思考過程」（positivistische Gedankengänge）や共同体思想が欠けているとの指摘が見られる。結局、1934 年 5 月、イエナ大学附属学校での 10 年にわたる教育実践を記念して併設されたのは、異年齢集団によって構成される「大学附属フレーベル幼稚園」であった。この幼稚園は大学附属学校と「有機的」に結びつけられ、それによって 3 歳から 14、5 歳までの約 120 人の少年少女に共通の「生活・教育共同体」（Lebens- und Bildungsgemeinschaft）の形成が目指されたのである。ペーターゼンはこの幼稚園の設立とともに、ドイツの大学の中に「幼稚園教育学」を生み出す

研究所も創設し、当初モンテッソーリへ着目して取り組もうとした幼児教育の「科学的な再考と浄化」の課題をさらに推し進めようとした。

以上みてきたように、ペーターゼンは「大学附属フレーベル幼稚園」の設立に際して、まずフレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel）の信奉者たちが実施していた幼児教育の科学的水準を問題とし、より科学的根拠に立った質の高い幼児教育の手がかりをモンテッソーリ教育学に求めたのであった。そしてさらに彼はモンテッソーリ教育学とも対峙し、異年齢集団によって構成される「真のフレーベル幼稚園」の実現を目指していった。この一連の流れの中に、幼児の単なる受け皿・収容所の創設ではなく、フレーベルが精神的に先取りしていた「人間の教育」を有機的に、かつ一貫して行い得るような質の高い教育の実現を目指すペーターゼンの意識を読み取ることができよう。

（4）鍵概念４：生命への畏敬

最後にイエナ・プランの質保証を考えるうえでも最重要の概念となる「生命への畏敬」（Ehrfurcht vor dem Leben）を「鍵概念４」として取り上げた。この「生命への畏敬」は、日本におけるイエナ・プラン受容というコンテクストのなかでは見失われてきたものである。ここではペーターゼンのイエナ・プランを初めて日本に紹介した小林澄兄の報告を取りあげ、その検証を試みた。

ドイツの新教育を代表するペーターゼンは、1923 年 8 月 1 日、ヘルバルト学派ライン（Wilhelm Rein）の後任としてイエナ大学教育科学講座の教授に就任し、翌年 4 月から大学附属学校で内的学校改革の実践に着手。その成果を 1927 年 8 月、スイス・ロカルノでおこなわれた新教育連盟第 4 回国際会議において発表することになったのである。この会議に日本人としてただ一人、正式な会員として参加していたのが小林澄兄である。彼は第二次大戦後、新教育連盟日本支部を「国際新教育協会」の名称で再発足させ、初代会長として活躍した。1920 年に慶應義塾大学文学部教授となり、1927 年 6 月 11 日から 10 月 17 日までの約 4 ヵ月間、この会議への参加を含み、ヨーロッパの新教育視察を行い、その見聞をまとめて 1928 年 6 月に『歐洲新教育見聞』のタイトルで出版した。これは日本人の手による第 4 回国際会議の報告書として、さらにイエナ・プランが発表された当日、その会場に居合わせた参加者の証言として貴重である。また、日本におけるイエナ・プラン受容史の視点に立てば、本書はその受容史の最初期に位置づけられるものである。

小林は本書「七、萬國新教育會議雑考（その二、歸朝後某所に於ける講演）」においてペーターゼンの発表について次のように記している。すなわち、「エナ(ママ)大學の附属の實驗學校をやつて居りますペエターゼン博士が『エナ(ママ)・プラン』といふものを最もよいものとして大衆の前で大に披露に及んだのであります」（引用文献⑥、56 頁）と。さらに小林はペーターゼンを「非常に有望な學者」であり、「このペエターゼン博士の新教育方法は、私には特に一應研究を要することと思はれた」（引用文献⑥、56 頁）とコメントしている。このように小林は、イエナ・プランを一つの「新教育方法」として理解しているのが特徴的である。

ドイツ・フェヒタのペーターゼン文庫には、第 4 回国際会議の期間中にペーターゼンが残したメモが収納箱（Kasten 17）に 7 枚残されている。メモ用紙は種類・サイズがまちまちで、これらが会議期間中のメモのすべてであるかどうかは疑わしい。しかも、これらのメモに限らず彼の残したメモの多くは、現在では使われていない古い速記の手法で書かれている。そのため解読が困難である。ドイツでその解読に取り組む第一人者シュタルマイスター（Walter Stallmeister）も、「1927 年 8 月 10 日のロカルノのテキストは不完全にしか存在していないし、それを再構成することは難しいであろう」（引用文献⑦、26 頁）と述べている。ただし彼は、前述の 7 枚のうち、8 月 11 日の日付がついた 1 枚のメモに着目し、そこに 8 月 10 日の発表内容が一部再録されていることを発見した。それは、8 月 10 日にイエナ・プランの発表を終え、その後の「研究・討議グループ」の討議準備のために要点をまとめたメモであるとみられている。そのメモの冒頭は「もう一度以下のことを強調する」と書き始められている。そこにはペーターゼン自身がイエナ・プランをいかに考えていたのかを示す内容が次のように記されているのである。すなわち、「恐らくイエナ・プランに固有のものは、その子どもが、あるいはその集団がうまくいっていないことを身体的に、あるいは態度で示しているなら、授業はいっさい中止せよ、と無条件に要求することである。常に教師は生命への畏敬から出発しなければならない！」と。ペーターゼンはイエナ・プランにおいて特定の教育方法から出発せず、むしろ自由意思を持つ目の前の子どもと、子どもたちで構成される異年齢集団の内的状態を理解することから出発する。何らかの特定の方法を目の前の子どもや集団に当てはめるのではなく、目の前の子どもや集団から出発し、その子どもや集団にふさわしい方法を見出していこうとする。したがって、ペーターゼンは何か特定の方法に固執することなく、1924 年 4 月以来、イエナ大学附属学校の学校生活と授業を「繰り返し」工夫し続けたのである 。

また、さきほどの引用文の中にはペーターゼンの重要な一文が登場する。それは「常に教師は生命への畏敬から出発しなければならない！」というメッセージである。これは彼の教育実践の根底にある基本理念を示している。子どもや集団がうまくいっていない状態を、彼は単に方法のまずさとしてみているのではなく、「生命への畏敬」の観点からみているのである。換言すれば、うまくいっていない状態とは、「生命への畏敬」が失われ、子どもの生命性が損なわれた状態にあることを意味している。ペーターゼンは教育方法を云々する前に、まず子どもの生

命に対して畏敬の念を持つことを大前提として教師に求めているのである。彼は手書きメモの中で文末に「！」をつけるほどにこのメッセージを強調している。また彼にとってイエナ・プランの根幹に関わる基本理念であるため、当日の発表からこれを省略するとは考えにくい。しかし、小林の記録からこのメッセージを読み取ることはできなかった。ちなみに、ドイツ・フェヒタにあるペーターゼン文庫には、第4回国際会議の期間中にペーターゼンが残した前述のメモのほか、この会議に参加し、後に彼の妻となるミュラー（Else Müller）が残した関連資料（大会案内、大会プログラム、発表時の配付物、手書きメモ）も保管されている。このミュラーが残した8月10日の手書きメモにもペーターゼンが発表の中で「生命への畏敬」について語ったことが記録されている。

以上みてきたように、小林はイエナ・プランを「新教育方法」の一つという視点で理解していた。しかし、イエナ・プランの根底に「生命への畏敬」という基本理念が存在していることには着目しなかった。そのため彼は、イエナ・プランにおいて年齢別学年学級制を廃止して異年齢集団での活動が重視される理由が理解できず、むしろそれを「大きな難点」（引用文献⑥、209頁）の一つと見なすことになったのである。

＜引用文献＞

①Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Langensalza: Beltz 1927
②Peter Petersen, *Führungslehre des Unterrichts.* Langensalza: Beltz 1937
③Peter Petersen, *Der Kleine Jena-Plan*, 47.-51. Aufl., Weinheim/Berlin: Beltz 1968
④Benjamin Ortmeyer, *Mythos und Pathos statt Logos und Ethos. Zu den Publikationen führender Erziehungswissenschaftler in der NS-Zeit: Eduard Spranger, Herman Nohl, Erich Weniger und Peter Petersen*, Weinheim und Basel: Beltz 2009
⑤Peter Petersen, *Die Neueuropäische Erziehungsbewegung*. Weimar: Hermann Böhlaus Nachfolger Hof-Buchdruckerei und Verlagsbuchhandlung G. m. b. H., 1926
⑥小林澄兄『歐洲新教育見聞』明治図書，1928年
⑦Walter Stallmeister,“Etc. der Jenaplan.”Bericht aus der Arbeit im Petersen-Archiv.Transkriptionsprojekt2: Locarno 1927, in *KINDERLEBEN*, Heft 28,Dezember 2008,24-27

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

①佐久間裕之、ペーターゼンにおける教育共同体と民主主義――イエナ・プラン批判の中心点をめぐって――、論叢：玉川大学教育学部紀要、査読有、2019、No.18、59‐82
②佐久間裕之、小林澄兄『歐洲新教育見聞』考――「萬國新教育會議」報告にみるイエナ・プランの理解を取りあげて――、教育新世界、査読なし、No.66、2018、53－59
③佐久間裕之、ペーターゼンにおける「教育共同体」思想の特質――『自由で一般的な国民学校のイエナ・プラン』に着目して――、論叢：玉川大学教育学部紀要2016、査読有、2017、49-67

〔図書〕（計１件）

Sakuma,H., Auf der Suche nach Peter Petersen und seinem Jena-Plan, in: Ludwig, H./ Fischer, Ch./ Grindel, E./ Klein-Landeck, M. (Hrsg.), *Montessori-Pädagogik als Modell: 60 Jahre Montessori-Forschung und -Lehre in Münster, Eine Dokumentation*, Münster:LIT Verlag, 2017, 462-464

〔その他〕

ホームページ等

①佐久間裕之、イエナ・プランの教師教育をめぐって
https://www.tamagawa.jp/graduate/educate/news/detail_14893.html
②佐久間裕之、イエナ・プランの教師教育をめぐって－その後の動向－
https://www.tamagawa.jp/graduate/educate/news/detail_15816.html
③佐久間裕之、イエナ・プランと「大学附属フレーベル幼稚園」、日本ペスタロッチー・フレーベル学会課題研究報告書『子育て支援に関する研究』、2018、18－25
④佐久間裕之、日本学術振興会科学研究補助金基盤研究(C)(課題番号 16K04487)「イエナ・プランにおける異年齢集団の質保証に関する研究」（平成28～30年度）研究成果報告書、2019、学校法人玉川学園 Document Tech-Station, 1-83

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。